

第五章 前論の続

A. 大意

「衆論」というのは「国内衆人の議論であって、その時代の普く人民の間に分布した智徳の有様を顕わしたものである、という事は前章で論じておいた。ここではこの「衆論」という事に関連で、あと二つのことを付け加えて論じておきたい。

第一は「衆論」なるものの強弱についてである。「衆論」なるものは「国内衆人の議論」であるとはいえ、その強弱は必ずしも人の数に由って決まるものものではなく、智力の分量に由って決まるという事である。「議論の力」の強弱は「人の数の多寡」に由らずして「智徳の量の多寡」によって決するのだ。「智力」は「体力」以上に個人差が激しく、「百人力」の智者がおれば「千人力」の智者もいる。或いはその反対の場合もある。それゆえ少ない人数でも智者が多ければ「議論の力」は強いのだ。つまり「衆論」は論者の人数ではなく論者仲間に分布している智徳の分量によって決まるのである、という事になるのだ。「一国の議論は p110-111 ついに衆論の名を得たるものなり。」

西洋諸国の例が示しているように、一国の智徳の大半は「中人（ミドル・クラス）」以上の智者に集中しているものである。だから「その国論と唱え衆説と称するものは、皆中人以上智者の論説にて、他の愚民は唯その説に雷同し」、雷同しつつ鞭撻せられているだけなのである。しかも「中人」以上の内にも智愚の差は段々限りあることなく存在し、そこにおける論争のなかで「千磨百錬、僅かに一時の異説を押し得たるものを、国論衆説と名るのみ。是即ち新聞紙演説会の盛んにして衆口の喧しき所以なり」。一国の人民はこの国論衆説につき従いその智徳に鞭撻せられていくのである。

ここで以上の議論を明治維新を経て現今に至る日本の歴史に適用してその「一証」を示すことにしよう。明治維新は「尊王・攘夷」の「赤心」によって端を切られたが、「尊王・攘夷」は明治維新の近因にすぎない。明治維新の遠因は「専制門閥」という「暴政の力」に対抗した、「人民の智力」にある。明治維新のそもそもの始まりは専制門閥に妨げられて自分の才能を伸ばす事が出来なかったもの、「字を知りて志を得ざる者」の憤りに発する。この「智力ありて銭なき人」の「智力」を源泉とする人民の智力が増大し、天明文化のころには、「暴政の力」と「人民の智力」とが相拮抗するに至る。そこに「ペルリ」渡来の事があったのである。これを契機に「復古攘夷の説」を先鋒にして「王制復古」を成し遂げ、さらに、「西洋文明」を援兵として、現今の廃藩置県までに至ったのである。このように今日に至る企ての原動力は「国内一般の智力」にあったのである。それゆえ、「王制復古は… p 1 1 8—9…者なり」。しかも「国内一般の智力」といっても、「国内一般の智力」の源泉になってその企てを指導したのは、ほんの一握りの人間たちの「智力」だったのである。「故に人間交際の事物は悉皆この智力の在る所を目的として処置せざるべからず」。

「衆論」という事に関連して付け加えて論じておきたい事の第二は「結合の変性」とでも称すべき事態についてである。人びとが結合（結社）し、人びとの議論が集合するとその趣が一

変することができるのだ。「人の智力議論は猶化学の定則に従う物品のごとし」なのだ。劇物であるソーダと塩酸とが結合するとその性質が変性して食塩となるように、人間同士も結合すると、一人一人の智力の合計とは別の、性質一変した新しい何物かを生み出すものなのである。

この「結合の変性」ということに関して、次のような事実が観察される。西洋の人の場合には人びとが集まる（結社する）と「智恵に不似合なる銘説を唱えて不似合なる巧を行う」のに、東洋の人の場合には人びとが集まる（結社する）と「智恵に不似合なる愚説を吐て不似合なる拙を尽くす」ことが多い。これは一体どうしてなのか。「今その然る所以の源因を尋るに、ただ習慣の二字に在るのみ」。「習慣」が第二の天性となって知らず知らずのうちに東洋と西洋の間にそのような差を生み出しているのだ。それでは「東洋（日本）」と「西洋」との間にどのような「習慣」の違いがあって、そのような相違をもたらしているのか。「東洋（日本）」の場合には結合するの手段を得ずして「無議の習慣」に制せられているのに対し、「西洋」の場合には結合するの手段を得て「衆口沸くが如き」議論し合う習慣がある。その違いである。それでは「東洋（日本）」の「無議の習慣」は何に由来するのか。それは「東洋（日本）」の人民が国事に関わろうとはせず、すべてをお上（政府）頼りにしてきたことによる。「唯政府に依頼して国事に関わらず…p126—127…遂に今の有り様に陥りたるなり」。

その良い実例が現在問題になっている「華士族の家禄」処分の問題である。「農民」の側にとっても「華士族」の側にとってもこの「家禄」の問題は利害対立する切実な問題であるはずだ。従って、「衆口沸くが如き議論」が起こってしかるべきだ。ところが「百姓も士族も…・ p 128…唯黙座して事の成行を見るのみ。実に怪しむべきに非ずや」。余輩は日本人が「無議の習慣」に制せられて「発すべきの議論を発せざるを驚くのみ」。「利を争うは古人の禁句なれども、利を争うは即ち理を争うことなり。今我日本は外国人と利を争うて理を闘するときなり」。今こそ「無議の習慣」を変じ、「衆口沸くが如き」議論をして衆智を結合し、理を闘して外国人と利を争うべき時なのだ。

B. コメント

1. 「中人以上の智者の論説」：福澤が期待を寄せているのは中人（ミドル・クラス）以上の人たちの智力である。かれらがオピニオン・リーダーとなって文明化が推し進められていくと見ているのである。一般民衆は中人以上の人たちがリードする「衆論」に付き従い、付き従うなかで啓蒙され鞭撻されていく、文明化はこのような構図のなかで推し進められていく、と見ているのである。

2. 「新聞紙演説会」：文明は「多事争論のなかにあり」。第五章は福澤のこの基本認識がベースとなって展開されている。西洋諸国で行われているように、「新聞紙・演説会」等を通じて「衆口沸くが如き」議論が広がっていくことを福澤は期待しているのである。

3. 「国内一般の智力」といっても：「国内一般の智力」といっても、その源泉をさぐれば中人以上の人たちの智力であり、中人以上の人たちの智力といってもさらにその源泉をさぐれば極々限られた「思想的巨人」の智力なのである。

4. 「智力のあるところ」を目的とせよ：「愚者に誇らるるも恥ずるにたらず、愚者に誉めらるるも悦ぶに足らず、愚者の毀誉は以って事を処するの繩墨と為すべからず」。

5. 「結合の変性」：社会学用語でいう「シナジー効果」の事。ただ福澤はマイナスのシナジーをみている。

6. 「西洋人の場合」：西洋諸国の人民一人びとりに当たってみると彼らは必ずしも智者のみではない、愚者もたくさんいる、それにもかかわらず、世間の実跡に現れている所を見ると、西洋の人民は智者の所為に似ている者が多い。これは一体何故なのか。福澤はその答えを「結合の変性」に求めているのである。

7. 「今我日本は外国人と利を争うて理を闘するの時なり」。：「今や西洋諸国との産業戦争・貿易戦争の時」。これが福澤の時代認識の基本である。福澤はこの基本認識から「生糸の直輸出」を主張した。この戦争に勝利するためにも「無議の習慣」を脱し、「多事争論」のなかで良き「結合の変性」を遂げていかなければならないのだ。